

佃陽子氏の博士論文審査は2011年6月6日、午前10時より12時まで、総合文化研究科18号館4階コラボレーションルーム2で行われた。審査委員会は総合文化研究科地域文化研究専攻能登路雅子教授、同ホーンズ・シーラ教授、同石橋純准教授、同矢口祐人准教授（主査）、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部の白水繁彦教授で構成された。

本論文「The Making of “Immigrants” in the United States: Case Studies in Contemporary Japanese/Japanese American Communities（アメリカ合衆国における「移民」の創造—現代の日本人／日系アメリカ人コミュニティを事例として—）」は、現在のアメリカ合衆国（以下アメリカ）における「移民」の「創造」を、日本人および日系アメリカ人コミュニティを事例として考察したものである。本文の250ページはすべて英語で執筆されている。

審査委員会は本論文を高く評価した。

まず本論文で取り上げられる事例研究が、それぞれ極めて優れた着眼点から論じられている。第一部は、従来の研究の多くがサンフランシスコ日本町（ジャパントウン）の保存運動を日系アメリカ人のアイデンティティ維持の有効かつ必要な手段として好意的に捉えてきたのに対し、むしろその矛盾と問題点を「移民としてのアイデンティティ形成と維持」という観点から鋭く指摘している。歴史資料を丹念に渉猟しており、完成度も高い、説得力のある論考である。第二部のジャップ・ロード論争は日本のメディアでも話題になったが、移民研究という学術的枠組みでその意義を考察したものはこれまでにない。研究者は概してこのテキサスの小村に住む保守的な白人住人の意見は聞くに値しないとみなしてきたが、筆者はテキサスを訪れ、かれらに直接インタビューし、その主張の背景を丁寧に分析している。その結果、メディア報道では見えなかった事件の多層的な側面が明らかにされている。また第三部の民族誌的研究には、従来の硬直化された移民概念を具体的に覆す極めて重要なケースが集められている。日系研究ではこれまで十分に取り上げられてこなかった人々に焦点をあて、移民研究の視座から大変示唆に富むライフヒストリーを紹介している。

このように各部が独立したユニークなテーマと事例を扱った研究となっており、今後はそれぞれが個別の研究書に発展していく可能性すらあるのではないかという指摘も出るほど、興味深い研究が並んでいる。

次に本論文は学際性に富んだ論考であり、地域文化研究専攻にふさわしい博士論文である。アメリカの移民研究、歴史学、文化人類学、さらには文化地理学の知見を援用することで、従来の移民研究にはない広がりを持つ分析が展開されている。

さらにこのような多様な事例と視点を持ちつつも、論文全体は最新の文化地理学と空間論の枠組みの中でまとめられている。「場所」「距離」「スケール」という地理学・空間論のキータームを使って各部をまとめることで、一見すると関係性が見えにくい各事例が「The Making of “Immigrants”」という全体のテーマにおさめられている。その結果、「移民」という、アメリカ研究・移民研究の基礎概念であるがゆえに、往々にして本質化され、無批判に前提化されるカテゴリーを再検討することに本論は成功している。

以上のように、本論文はアメリカにおける「移民の創造」を理論と事例の両面から鋭く分析するものであるが、むろん、いくつかの弱点と思われる個所も存在する。

まず、本論文は優れた英語で書かれているが、細かな表記に多少の誤りが散見される。とくに日本語の翻訳が必ずしも適切とは思えない部分がある。また、多様な学問的アプローチを用いているため、特定の先行研究に依拠し過ぎていたり、他の先行研究の参照が不足していたりする面があることも問題とされた。例えば第三部で用いられる「企業城下町」という概念は、複数の異なる日系企業が集中するロサンゼルス南部には適用し得ないのではないかという指摘がなされた。この第三部に関しては、フィールドワークの方法論の説明が不足しているというコメントもあった。さらに、地理学・空間論を用いた理論的アプローチは、本論に並ぶ多様な事例をまとめる極めて興味深い枠組みではあるものの、その有効性が十分に示されていないという意見が複数の審査員より出された。従来のアメリカ移民研究に新たな展開をもたらす切り口である理論ではあろうが、本論文の記述ではまだ説得力に欠けるという批判であった。

以上のような問題が指摘されたものの、これらは本論文の学術的な価値を損なうものではない。むしろアメリカの移民研究の根底にある「移民」という概念を巡る諸問題に正面から取り組んだ本論文の課題は、アメリカ移民研究そのものが抱える今後の課題を一層明らかにしたと言えよう。英文で書かれた本論文は日本のみならず世界の研究の展開にも大きく寄与する労作である。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定す。